

---

**気が付いたらオッサンでした。**

系

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

気が付いたらオッサンでした。

### 【Nコード】

N0788Y

### 【作者名】

糸

### 【あらすじ】

さつきまで、確かに自室にいたはずなのに。田中晶はどこにでもいる一般的な大学生。一人暮らしのアパートでテレビを見ながらげらげら笑っていたはずなのに、気づけば見知らぬ家にいました。おまけに……「お、オッサンになってる……!?」性別・年齢が全く違う現在の身体。茫然としている晶の前に命の恩人である少年が現れ「とりあえず、金を出せ」と天使のような無垢な表情で強請ってきた。勿論、手持ちの金は何もない。ライフカードはすでに0なんですけど!?! と、TSの意味を履き違えている作者がどたばた

コメディを目指していく予定です。

ぞく ぞく ぞく

新雪を踏む音だけが、この森の中に響く。

今は長き冬。この時期、この森はまさに陸の孤島になる。普段からあまり人の出入りが多くない森は、冬になるとその深き雪に包まれ、一層人の足を遠のける。森の生き物の多くは冬籠りをし、時折見かける生き物と言えばなかなか得られない食料を必死に探している姿を見せるだけだ。幸い、この森一番の凶暴とされる熊は冬眠中であり、大陸で害獣となされる狼は、この森にはいない。ある意味、冬は安心できる時期なのかもしれない。

そんな中、ただひたすら歩き続ける者がいる。この森に住む変人カリイ。齡十にも満たないその風貌は、この雪の中では長く生きられない、そんな儂さを感じさせるが、その足取りは迷いなくただひたすら動かされる。この時期には必須の、厚手の毛皮のコートに同じく厚手のブーツ。ふわふわの帽子と耳あて、さらに手袋を身に付けたその出で立ちは、まさに防寒準備万全だ。背中にその背には不釣り合いな大きめのバッグを背負い、手袋で包まれた小さな手にはさらに不釣り合いな大きめの壺を抱えている。一体何のため、にこの雪の中歩いているのか、それはカリイ本人しか分からないだろう。

そして、ようやく目的の地に着いたようだ。この極寒の中、一片も凍っていない湖。この森にいくつが存在する湖の一つだが、唯一冬でも凍らないこの湖には不思議な力があると言われている。その湖の畔まで行けば、手にしていた壺をよいしょと下ろし、一つ伸びびをする。そして、バッグから柄杓を取り出せば、一掬いずつ湖の水

を壺へと移していくのだ。

その作業を繰り返しているうちに、突然あたりの音がなくなった。もともと無音に近い森ではあるが、雪の降るわずかな音や、雪の重みに耐えきれなくなり、木の枝から滑り落ちる雪の音など、自然が作り出す音はいくつもあった。しかし、それら一切が突如消えてなくなった。完全なる無音。カリイは肌に突き刺さるかのようなこの無音に、神経を集中させる。

途端、眩しい光があふれる。とつさに目を閉じ、視神経を失うという事態にはならなかったが、閉じた瞼の裏にまで突き刺さるかのような強烈な光に頭がくらくとした。

徐々に収まる光を感じ、そっと目を開ける。そして、息が止まった。

空中に、人型に光が輝いていた。そしてそれはやがて輝きを失い、代わりに肉体を形成していく。

完全に人の形になった光は消え、残ったのは人間。そして、重力の従い、勢いよく地面に落ちる。と思いきや、真下は湖だったため、ぼつちャーん……と森全体に響き渡るかのような水音と盛大な水しぶきをあげて、水中に落下した。沈んだ身体は浮かんでこない。

「はあ……………」

面倒臭そうに

嫌な表情を一切隠さず、カリイはため息をつい

た。

〇〇（後書き）

見切り発車です。

（20111030）

なんだか、いい匂いがする

うつすらと、周りの風景が見えてくる。それを感じれば、ああ、今私寝てたんだな、なんてどこか間違った思考が流れてくる。

徐々にクリアになっていく視界。そこに映るのは見なれぬ天井。まるで雪山のロτζジにでも来たのかと錯覚してしまうような丸太で作られましたといわんばかりの天井が、そこにあった。

何度か瞬きをしてもそれは消えることはない。ああ、これは夢か、とごくごく単純にそう納得した。だってさっきまで自分は自室でテレビを見て笑っていたのだ。それがいつの間にかこんな所に来ているなんてありえない。きつとテレビを見ながら寝てしまい、そして今こんな夢をみているんだ。

そんな風に脳内で納得しつつ、ゆっくりと身を起こす。あたりを見渡すとやはり先ほどの考えは正しいだろうと思わせるような室内だ。丸太がそのままの壁や床。窓は二重になっている。カーテンはないが、隙間風も入ってこないほどしっかりと計算して建てられているのだろう。室内はほんのりと暖かい。こじんまりとした部屋だが、アパートの自室と同じぐらいの広さがある。妙に居心地良く感じるのはそのためだろう。

夢にしてはやけに凝った内装だなと自分の妄想に苦笑しつつ、軽く頭を振った。

「あ、れ…」

自分の髪はそんなに長くない。丁度この間美容院にいったボブカットにしてもらったため、頭を振っただけで髪が右から左まで流れ



ていくはずはない。

そして、それに気付いたために発した声に、さらに疑問がわき出た。

「なんで声、低い……」

別に元々美しい声というわけではないが、それでも一般的な女性の声の高さだったそれは、今はまるで男性のような低さだ。どことなく耳に心地よく感じるのは、単に好みの音程だからかもしれない。だが、それが紛れもなく自身の口から発せられたことに疑問があるわけ。

「うつそ……!? え、なんで!?!? どーして!?!?」

慌てた。その拍子に己の手を見ると、そこには指の短い赤ん坊のような己の手ではなく、ごつごつと節目のある大きな手。まるで男性のような手があった。

「あ、そっか。夢だもんね。そーそー、夢だからか。なんだ、びっくりしたー」

誰にともなくそう呟けば、再びボタンと布団の中に身を預ける。さっきまで焦っていた自分が馬鹿みたいに感じ、思いつきり笑った。

そう、ここは夢の世界。声が低かったり手が大きくなったりまるで自分が男のようになっていたとしても、それは夢だからという言葉で片付けることができる。そんな当たり前のことに安堵し、さて目覚めるためにひと眠りするか、夢の中でひと眠りだなんて自分器用だなんてセルフツッコミをしていると、キィ、と扉が開く音がした。

「……………なにまた寝てるんですか。二度寝とはいい度胸ですね」

鈴を転がしたような、可愛らしい声が耳に届いた。その声に抗うことなどできず、再び身体を起こした。

天使がいた！

おそらく、その時の私の顔は酷いものだっただろう。それほど驚いたのだ。

そこにいたのはまさしく天使だった。否、本物の天使など見たこととはないが、自分が想像する天使そのものが、そこにいるのだ。

僅かな光でも輝くその髪は見事なブロンド、こちらを見据える瞳は深いグリーン。絶妙なバランスで配置されている顔の造作。透き通った肌に纏う雰囲気は清浄なもの。そして、おそらく十歳にもなっていないだろう、その身長。これにオプションで羽がついていたら完璧な天使だ。弓矢を持たせたらキューピットだろう。男の子か女の子か分からない、どっちでもOK！な子どもにじいっと見られれば、変な顔になるのは仕方がない事だと思う。………若干、不機嫌そうな表情に見えるのは、私が酷い顔をしていたからだと思う。そう思うことにした。

「へえ、天使って本当にいるんだね」

「天使？ なんですかそれは。そんな戯けたことを言って誤魔化す気ですか？」

「誤魔化すって…。別に私は誤魔化すつもりなんか一切ないんだけど」

「そうですね、それなら別に構いませんが。ところで、もう大丈夫そうですね。意外と頑丈な身体をしているようでよかったですね」  
「へ？ 大丈夫って別に私、最初から悪いとこなんてないよ？」

すると天使（名前は勿論分らない）は顔をしかめた。そんな表情をしていても可愛いんだから美形は得だ。

「真冬に湖の中をすっぱだかでも熱の一つも出さないのは、なかなか珍しいことだと思いますが…」

「何その設定。私夢中でそんな痛々しいことしてんの!？」

「夢？ 貴方こそ何言ってるんですか。夢でもなんでもなく、現実が起こった事ですよ」

「やだなあ、現実って！ もーいーよ。あと長くても数時間もすれば覚めるんだから。まあ、夢にしちゃあかなりリアリティあって面白いけど」

そう言えば益々顔をしかめる天使。あらら、私また何か悪いこと言っちゃった？なんて考えていると、天使はつかつかとこっちに近づいてきた。そしてぐいつと私に顔を近づけてきた。

突然のことにどぎまぎして何の反応も示せない私に、天使はじいっとただ私の目を覗き込んできた。

そして、「もう無理だ!!」と叫ぼうとした瞬間、ぱつと天使は私から離れた。危ない危ない、もう少しでこの天使に手を出してしまうところだった。夢とはいえロリコンは犯罪。犯罪、ダメ絶対!

「……………どうやら、貴方は本当に夢だと思っっているようですね」

「だーから、最初からそう言ってるじゃん！ これは私の見ている夢で、あなたは私の想像？ 妄想？ の産物で…」

「ここはフレイジュの森。ガスターニヤ大陸の最北に位置し、一年の内、三分の一が雪に覆われる森。人の出入りはほぼなく、さらに冬の時期は陸の孤島になる」

「へー。私にしちゃあ凝った設定だね。夢の中で世界観創ってるってどんだけーって感じだけど」

へらへら笑っていると天使は益々不機嫌になったようだ。

「この森で唯一不凍の湖で一つの光が現れた。やがてその光は人型へと代わり　そして、一人の人間が現れた」

「ほー。んでその人間が私だってわけだ」

「……そこまで理解していて、まだ夢だと言うつもりですか？」

「だって夢だもん。私はさっきまで自分の部屋にいてテレビを観てたんだもん」

「てれび？　なんですかそれ」

「テレビってのは、箱の形をしていて、そこに映像が流れて……」

「映像が流れる？　水晶球のことですか？」

「いやいやいや、そんなファンタジーチックなもんじゃないよ。科学によって発展した……」

「かがく？」

なかなか会話がかみ合わない。というより、この会話は不毛な気がしてきた。何故なら目の前の天使は私が創りだした妄想　夢なのだ。あと数時間もすればお別れする存在なのだ。別に懇意にする必要はない。確かに現実世界ではお目にかかれない美形だから、夢の中だけではいい思いをしてもいいと思うが、それよりも私はさっき見ていたテレビの続きが気になる。リアルタイムで観るつもり満々だったからビデオなど撮っていない。早く目覚めてどうなったのか観たいのだ。

「とりあえず、私寝るわ。そしたらこの夢から覚めると思うし」

「……まだそんなことを言うのですか。仕方がありませんね。それならもう少し待ちましょう」

はあ、盛大なため息をつかれました。なんで天使にそんなことされなきゃいけないんだと思いつつも、どうせあと少しだと考えれば

別に腹も立たない。「それでは、おやすみなさい」と言って部屋を出ていく天使にひらひらと力なく手を振れば、再び布団を首までかけ目をつむった。

目覚めたとき、まだ番組が終わっていませんように、とそれだけを願って、晶は眠りへとついた

01 (後書き)

話がなかなか進まない…。

(20111031)

どうやら、私は未だ夢から目覚めないようです。

「  
.....」  
「  
.....」  
「  
.....」  
「  
.....」

繰り返される、無音。なんだか文法的におかしいような気がするが、そうしか言いようがない。

先ほどから天使と向かい合うこと十数分。時計がこの部屋にはないので正確な時間は分からないが、おそらくそれぐらい経っているだろう。時折ちらりと天使の顔を盗み見れば、天使は相変わらずの表情（やや無表情）で私を見ている。その視線に居た堪れなくなつて、再び私は視線を己の膝に下ろすのだ。

そして、目に入る己の手。

それは見なれた手ではなく、見なれぬ男の手。

だけど、紛れもない己の手。

.....いい加減、視力がおかしくなつたのでは？という問いかけは止めた。

「.....それで、貴方の言い分は？」

ようやく音が訪れたと思った。それは天使の発する声で、鈴を振つたかのような耳に心地の良いものだ。いっその声に流されてしまいたいと思うのだが、今己の実に生じていることを考えればそう

することもできず、代わりにきよろきよろと落ち着きのない視線を送ることになった。

「あの……、ここ、私の夢の世界じゃない、んでしよう、か……？」

「何度も言いますが、ここはぼくにとつては現実の世界。先ほどから貴方が何度も口にしていますが、夢なんかじゃありません。もしこれが夢だと言い張るのなら……実力行使もやぶさかではないですが」

そう言つてにこりと微笑むも、その笑みは何故だか背筋がすつつと冷たくなる笑みだ。正直怖い。怖いよ天使。実力行使という不気味な響きと相まって、それに是と答えたら最後、今度は二度と目が覚めないような事態に陥る、そんな恐怖がある。そのためぶんぶんと勢いよく首を振つて否定の意を表すのだ。

おい、ちよつと残念そうな顔をするなよ。その残念そうな顔がまたきゅんきゅんするから悔しくなるじゃないか！ という私の心の声などは相手に勿論聞こえることはない。

「ここがその……現実世界だとすれば、とてもとてもそれはそれはおかしいことになるんですが……」

「もうすでに貴方の言葉遣いが大人としてどうよつてもものですけどね。」

それで、貴方にとって『おかしい』とは一体何でしょうか

「まず……。ここは、どこですか？」

「ガスターニヤ大陸のフレスコ国内にあるフレージユの森。そこにあるぼくの家。季節は晩冬。あとひと月もすれば春になる」

「……日本じゃない、んですよね、やつぱ」

「ぼくが記憶する限り内ではそれに該当する国はないですね」

「で、あなたは天使？」

「違います。ぼくはこの森に住んでいるだけの人間です。天使なんでものは架空のものであり、一種の偶像です」



「そ、そんな説明は別にいらないよ！ あ、名前、は？」

「カリイ。そういう貴方は？」

「田中晶」

「タナカアキラ？ 名字付ということは、それなりの家に育った人ですか？」

「いやいやいや、そんなことないよ！？ フツの、一般庶民だよ？ 私の国では名字名前が当たり前なだけで」

「それは興味深いですね。ここでは名字は特権階級か、または国に貢献した者にのみ与えられる一代限りの勲章です。タナカは変わった国にいるんですね」

「私から見ればこっちのほうがよっぽど変ってるけどね」  
「はあ、とため息をつく。」

「何が何だかさっぱりな状況だ。聞き覚えのない国、聞き覚えのない土地。聞き覚えのない習性。今までの自分が暮らしていた世界とは全く違う、異国の地。」

「日本のことを知らないどこか遠い外国ではないかと考えたのだが、それでも最大の謎は残ったままなのだ。」

「一番の疑問なんだけど……」

「なんですか？」

「……………なんでわたし、『オッサン』になってるの？」

その言葉に、天使 カリイは首をかしげた。

「オッサンと言いますが、貴方は私の目の前に現れた時からその姿ですよ」

「違う、ちがーう！ 私はうら若き乙女なんだけど！！ 二十歳の大学生なんだけど！！ 断じて、断じて性転換手術なんか受けてな

いんだけどー！！」

力の限り叫んで全身で呼吸をする。

そう、一番の疑問は己の身体の変化だ。

何故年齢が違うのか。

何故性別が違うのか。

性別なんて瑣末な問題さ、ふつ。なんて格好はつけられない。むしろこれが一番のパニックの原因なのだ（この際年齢に関しては目をつむろう）

「私は生まれて二十年間、女として生きてきたし、その自覚も実証もある。だけど……だけど、なんでこんな姿に……！」

うなだれる私を前に、カリイは再び首をかしげた。

「何か……力が働いたんでしょうかね」

「ちから？」

「ええ。あなたが自称乙女であるはずなら、今の姿は誰かの作為によつてなされたもの。そう考えるのが自然じゃないですか」

「作為で……。人の性別なんてそう簡単に操れるはずが……」

「できますよ」

な ん で す と ！ ？

カリイさらりと爆弾発言を投下した。

02 (後書き)

進まない…!!

(20111103)

「人の性別を変えることはできません。ただし、それは誰にでもい  
うわけではありません。それなりの力を持った人物でないと、為し  
得ません。が、逆に言えば、それなりの力を持った人物なら、人の  
性別を変えることができるんです」

「そ、それなりの力って…?」

「魔力ですよ。神力でも可能です」

きたよファンタジー!! これぞまさに夢オチへ一直線じゃない  
か!!

そんな内心の声がカリイに聞こえたか聞こえないのか(聞こえた  
のなら恥ずかしい事このうえないが)、カリイは軽く首をかしげた。

「不思議そうな顔をしていますね」

「そりゃそーだよ…。魔力で…。神力で…。もう、ね。話が王道す  
ぎてどー反応していいかわかんなくなってきたよ…」

「何をそううなだれることがあるんですか。当たり前のことを話し  
ているだけなんですけど」

「私にとつてはそれは当たり前のことじゃなくて、非現実的なこと  
なの」

「タナカはおかしなことを言う。タナカの言葉を信ずるなら、今の  
タナカは『非現実的なこと』なのでしょう? だけど、それは『現  
実に起こっていること』なんです。非現実が現実になった、つま  
りそれは現実として受け止めなければならぬ事実なんですよ」

「そ、そんな屁理屈みたいな正論なんて聞きたくないっ! 聞きた  
くない、けど…」

うっ…と唸りまくる。

カリイの言うことは正しい。些か論理の飛躍があるような気がしなくもなくもなくもないような気がするが、とりあえず今この状況を現実だと受け止めなければならぬ。この状況が既に非現実的であるが、それを受け止めるということは現実だと認めることであって、今までの考え方や常識の一部が覆されることになる。

軽いパニック状態だ。いや、それを最初から　この姿になった時点で受け入れていたはずなのだが、こうして改めて人に言われると衝撃が違う。

口から唸り声の代わりに再びため息が漏れた。

「まあ、もういや。何でも受け入れるよ。郷に入れば郷に従え、ファンタジーには即慣れるって言葉があるし」

「よくわかりませんが。とりあえず落ち着いたようなので話を続けますね」

淡々と人の一大決心を流すなよ。でもここで余計な口を入れるとなんだか叱られそうな気がするので黙っておく。

「一番可能性が高いのは、タナカに誰かが『変化』の魔法をかけたことです。この魔法をかけられた人は魔法行使者の思つ姿にすることが出来る。誰かがタナカを今の姿になるよう魔法をかけたのではないでしょうか」

「誰かって誰よ」

「そんなの、ぼくが分かるわけないでしょ」

につこりとキレーなお顔で微笑まれました。きらきらと光が散っているように見えるほどの、いい笑顔だ。

「うう……。人様の恨みを買うような生活はしていないハズなんだけどなあ……」

「面白半分ですわ。魔法をかける者もいますよ」

「私はオモチャじゃない！！」

「ぼくに怒鳴らないでください」

「あ、ごめん。……それじゃ、私にその魔法をかけた人を見つけて、ぼっこぼこにして元の姿に戻させなきゃいけないのか……」  
「だけど、それをどうやって探そうか。ふむ、と腕を組んでいるとさらりと聞き逃してはいけない重大なことが耳をかすめた。」

「治してほしいのなら、ぼくができますけど？」

「そういうことは早めに言ってよ……!!」

03 (後書き)

ちよい前進しました。

(2011115)

まさに天からの声。その言葉に私の表情はぱつと明るくなった。

「え、マジで!? マジでカリイが治してくれるの!?!」

「ええ。ぼくも一応術を学んでるので、おそらくタナ力にかけられた術なら解けると思えますよ」

「すごい、さすが天使! さすが美形!! パーフェクト!!」

思わず万歳三唱をしてしまった。やはりファンタジーの世界の美形は力がすごいという王道展開は外せないんだね!

うきうきと踊る心のまま、カリイに頼んだ。

「お願いします。私を元の姿に戻してください!」

「いいですよ。」

ただし、それ相応の対価はいただきますよ」

「えっ……」

「そうですね……。……結構強い術ですね、これ。なかなか複雑に織り込んでいます。これは解くのに一日程かかりそうですね。それならば……。金200、とここですね」

カリイは掌を私に向けて目を閉じ、神経を集中させた。そして少しずつ少しずつ言葉を発し、そして最終的には金200という何やら嫌な予感しかしないような言葉を発した。

「あんの……。つかぬことをお伺いしますが、金200とは相場としていかほど……?」

「通貨の単位が異なるのですか? そうですね、分かりやすく言うと、所謂一般庶民が一年間暮らすために必要な金額は、金5枚、とつたところですね」

「ごっ……!? え、ちょ、ちなみに一年って何日間、それは何人家族の話で!?!」



「こちらでは300日で一年。先ほどの家族構成としては夫婦に子ども二人で換算しています」

てことは、日本でも標準的な一般家庭であるとして、一年は少し短いが一応同じ日数と換算すると…。一般家庭の一年間の必要金額っていくらだ？ そんなの私知らないぞ…！？ 貧乏学生の一人暮らしの金額ならよく知ってるけどね！

と、軽く脳内での現実逃避を始めた私だが、そこで逃げては話が進まない。とりあえず、出てきた数字を正確に分析すると、それは小学生でもわかりやすい割り算で答えが出てきた。

「てことは、金200とは一般家庭は40年か暮らせるだけの金額…」  
「そうなりますね」

にこにこにつこり。笑顔でなんつー鬼畜なこと言いましたかこの天使は！！ 40年間分の金額といたら、すさまじいことになるなないですか！！ 軽く就職から退職までいっちゃってるような気がするんですけどー！？

言いたいことは山ほどあるがただぱくぱくと口を動かすだけに止まった。言葉が出ない、というのはこの状態を指すのだろうか。気持ちだけが急いで言葉が一つも出ない。そんなもどかしい気持ちになる。

「まあ、貴方はどうやら身一つできたようですし、手持ちの金銭なんて期待していませんよ」

「えっ…」  
「貴方に選択肢を差し上げましょう。」

一つは、今すぐこの家を出て自力で貴方に術をかけた人物を見つける。

もう一つは、目標金額がたまるまで、ここで下僕として働くこと。  
さあ、どちらがいいですか？」

一つずつ指を挙げつつ提案するその姿は慈愛に満ちていた。満ちていたが、その発言は物騒そのものだ。というか選択肢がないようなものなんですけど…!？」

この世界についてなんら知識のない私が一人で生きていくのは無理。よって、一つ目の選択肢を除外する。

すると、残る一つしか選択肢はないのだが、その内容が恐ろしい。ここに留まらせてもらうことはありがたい。ありがたいが「下僕」て…。下僕てなんですか!？」

「さあ、選んでください。ぼくは優しい人らしいですからね。なかなか良心的な選択肢を差し上げたつもりですよ？」

「ぼ…」

ぼったくりもいいところだー!!

残念ながら、晶の叫び声は空しく消えていった。

「よ、よろしくお願いします」  
「こちらこそ、よろしくね」

彼の足もとにひれ伏す 別名土下座 して、私は願った。

一刻も早く、この状況を打破しなければ…!!

こうして、私の下僕ライフ  
もとい、オッサンライフは始まっ  
た……。

## 04 (後書き)

少し訂正。

(20111127)

ようやく第一段階が終わりました。  
プロットなんて作っていませんので、行き当たりばったりで進んでいきます。

(20111105)

オッサン生活三日目。

なんの因果か、普通の女子大学生をしていた私が、全然見知らぬ土地（世界）にやってきて三日経ちました。それもオッサンの姿での生活です。

人間、三日もあれば慣れるもんですね。いや、慣れるというか強制的に慣れなければならぬ心境になるもんです。雑巾片手にそんなことをしみじみと思っています。

普通、こんな状況（所謂異世界にきちちゃったよ！）になったら絶世の美少女になるとか特殊な能力を得るとか、一万歩譲って性別が変わっても美青年になるとか、そんなことになるのに、なにがどーしてオッサンになんきやいけないのよ！！と嘆いた夜もありました。

けれど、なってしまったものは仕方がない。諦めました。今は一日でも元の姿と元の世界に戻ることだけを目標に、日々オッサン生活をしています。

「タナカ、そつち終わった？」

「あ、終わりましたよ」

「それなら、こつちもお願い」

「はいはい」

よいしょと水の入ったバケツを持ち上げ、指示された方に向かう。

指示した人物はカリイ。見た目十ぐらいの天使と言っても過言ではない容貌の子ども。私の現保護者かつ雇い主かつ家主かつ御主人様。この世界で身寄りのない私を引き取ってくれた心優しい人……

ではなく、強烈な守銭奴。金至上主義だと分かったのはつい最近のことだ。

なんといつても「趣味：金儲け」だから行く先が末恐ろしい子どもだ。だが、そのことに関しては私は何も言えない。何故なら私は彼の下僕だから。口ごたえだなんてそんな恐れ多いことはしない。すれば裸でこの家を追い出されるだろう。それぐらい、わけもないという性格もこの短い生活のなかで知った事実だ。

「それにしても…。こんな高いところ、よく物が置けたね」

ほつと手を伸ばして、本棚の一番上に乗っている物を次々と下ろしていく。今の私の姿は、元の私より20cmは背が高い。その私が台の上に乗ってさらに手を伸ばして届く程の高さの本棚だ。この小さな彼の背では到底届かない場所なのだが、たくさんの物が乗っている。不思議に思っただけで尋ねるとさも当然のように彼は答えた。

「以前ここに来た人に乗せてもらいましたから。勿論、今のぼくの姿では届きませんし」

「以前ここに来た人？」

「はい、この森は不可侵の森で滅多に人はこないんですが、たまに無謀な旅人がやってくることもあるんですね。それで案の定道に迷って倒れている人がいるわけです。そのまま見殺しにするのも後味悪いですし、仕方がないので保護してしばらく家の雑用をさせることがあるんです」

「へえ、ナルホド。なんだ、カリイって意外と人拾うんだね」

「その言い方は語弊がありますね。後味悪いだけで拾うばくだと思えますか？」

「……………いいえ、きっと結構な額の金銭をせしめていると思います。そう言えばにつこりとほほ笑むカリイ。笑みだけ見れば極上スマイルこの上ないんだけど、裏があることを知っている私としてはなんだかうすら寒い感じがする。」

「命を助けたんですからね。本来なら命をもってかえすところを、

金銭でいいというぼくの懐の深さに、皆さん感謝していましたよ」  
「うわー、あくどっ！ と内心思うも口には出さない。これ保身の  
ために重要なこと。」

全て物を下ろした本棚の上を丁寧に雑巾で拭いていく。それが終  
わると下ろしたものを一つ一つ埃を払いながら見ていった。

「ねえカリイ。これ全部必要なものなの？ いらなければ処分すれ  
ばいいのに」

「処分？ いつか使うかもしれないものなの？」

「あのね、あんな手の届かない所に置いてあるもん、いつ使うのよ。  
使わないから上の方の上の方にと放置していったんでしょ」

そう言えばカリイはふむ、となんだか納得したように頷いた。

「それは言えますね。今存在を思い出したものもありますし」

「でしょ。なら要らないものはぱつと捨てる。そうしたらこの家、  
もつと快適になるって」

カリイの家は一人で暮らすには十分すぎる程の広さがある。所謂  
5LDKと言ったところだろうか、カリイの部屋、私が使わせても  
らっている部屋、客間、単なる物置と化している部屋、わけのわか  
らない物で埋め尽くされているカリイ曰く実験の部屋と、本来なら  
広々としているはずだが、その部屋全てが物で溢れかえっている。  
それらの部屋を一つ一つ片付けているのだが、なんと一部屋片付け  
るのに一日で終わらないというから、そのすごさは想像しやすいで  
しょう。現在頑張っているカリイの部屋片付けも今日で二日目。な  
んとか今日中に終わらせたいのだが…まだその兆しは見えない。

「カリイって、もしかして捨てられない男？」

「…物は大事にしなさいと教えられているので」

「大事っていうかめんどくさいだけじゃないの。片付け下手とか」  
「びくり、とカリイの眉が動いた。あれ、なんか私ヤバいこと言っ  
ちやっただ？」

「面倒くさいから貴方を捨てても構わないですが…」

「掃除大好き！ やりがいがあるってスバラシイ…！」

都合の悪い不吉な言葉は聞こえませんか！ という態度で掃除を再開する。今この家を追い出されたら間違いなく野たれ死んでしまっただろう。下僕は御主人様に逆らってはいけません。命令通りに動きます、はい。

掃除を再開した私を横目で見て、カリイも先ほどの荷物の選別を始めたようだ。

こうして、なんとか私の下僕生活もつつがなく過ごしているのだ…。



01 (後書き)

とりあえず、日常を

(201111113)

## オッサン生活七日目。

どうやらこの世界は十日で一週間、ひと月は三十日なので、三週でひと月のようだ。この家で下僕生活をしつつ、この世界での常識についてぼつぼつとカリイから教えてもらっている。どのくらいこの世界に留まるのか分からないけど、やはり一般常識ぐらい知らないといと色々と不便だろうという考えからだ。尤も、それを知っているも私はこの世界の知人と言えればカリイしか知らないなので、それをどこかに披露するということは永遠になさそうな気がするが…。

そんなこんなで、5LDKの内三部屋の掃除が終わった。とりあえず、普段使うカリイの部屋、私の部屋、客間の掃除が終わったので、今度はキッチンやダイニングの掃除に取り掛かっている最中です。いらぬものを処分しようと張り切っていたのですが、どうやらただ捨てるのではなく、売れるものは売ってしまえというカリイの守銭奴らしい主張に納得し、物置部屋に突っ込んである。そのため、その部屋は物が増える一方で実際にはあまり整理されているとは言えない。あれだね、とりあえず押し入れにつっこんでおけ理論と同じだね、と脳内で思いながらも拒否権のない私は淡々と物を部屋に入れていく。そろそろ許容量オーバーになりそうだと思いつつ、淡々と使命をこなしていく。

そして、今夢中になっているのが、キッチンの整理だ。基本的な調理器具は日本と同じようで、鍋やフライパン、包丁やまな板など名称が分かりやすいものがある。それに加え、一体何に使うんだと首をかしげてしまうようなものもあるが、そのあたりはスルーしておく。ただ、名称が分かるものも「明らかにこれ長年使われてないんじゃないね？」的な状況だったので、とりあえず必要最低限のものか

ら洗ったり磨いたりしている最中だ。包丁を研いだことなんてないのでテキストにやってみたら、意外と上手に出来て自己満足している次第である。

「カリイ、お茶淹れたんだけど飲む？」

「いただきます」

ダイニングで読書に勤しんでいたカリイはその声に反応して読んでいた本を閉じた。ダイニングは相変わらず雑多な状態だが、とりあえず食事が摂れるスペースは確保している。

発掘した茶器と焼きたてのクッキーが乗ったお皿をトレイに乗せ、机の上にそつと並べていく。ゆつくりとカップに紅茶を注いでいけば、ほのかにその香りが鼻腔をくすぐった。

「はい、今日の茶葉はぐ…グリーン産？ の茶葉ですよー」

「へえ、そんなのあつたんですね」

「発掘しましたよ。未開封だったからまだ大丈夫でしょと思って使っちゃいました。キレイな色といい香りですよ、これ」

「そうですね。グリーンは紅茶の有名な産地ですからね。これ、包みに星がいくつつついていましたか？」

「えっと…、確か五つついてましたかね？」

「ああ、それですと最高級のもんですから尚更ですね。…ああ、この香りはまさしくですね」

香りを楽しんでから一口飲む。その姿は幼いながら気品さえ漂っている。

「美味しい…。タナカ、貴方淹れるの上手ですね」

「どうせなら美味しく食べたり飲んだりしたいじゃないですか。そのためなら努力は惜しみませんよ」

へへん、どーだい。私の食に対する執念は深い。なんといつても貧乏生活をしているのだ。安い食材でいかに満足する食事をするか、それに全てを注いでいたのだ。紅茶もその一つ。500g、100円の安い紅茶を美味しい淹れ方で淹れて楽しむのが貧乏学生の贅沢なん

だ。と、まさかそんな特技がここで生かされるなんて思ってたけどね。

「それと、これはさつき出来たばかりのクッキーです。材料は多分…合っているはずなんで、口に合うと思いますか」

「先ほどからいい香りがしていたのはこれですね」

そう言っただけでクッキーを頬張る。

「……おいしい…」

「でしょでしょ？ 火加減とかさー、かなり苦労したんだけど、かなりいい出来になったんだよ、これ」

「タナカは向こうの世界で料理人だったんですか？」

「まさか！ 単なるしがない貧乏学生だよ」

「それにしても料理の腕は素晴らしいと思いますか」

「だから貧乏学生だからね。色々工夫しないとなかなか食事も寂しいんだよ」

「タナカが来てから食事に関して充実しましたね」

「ま、それは私も食べたいからついしてみたんだけど」

褒められて悪い気はしない。私も掃除ばかりしているわけではない。何と言っただけのタナカ、はつきり言って生活に関して全く関心がない。食事は何かに没頭すれば忘れるし、掃除なんてその発想がない。どうやらこの世界にお風呂という概念はないので、そのあたりは仕方がないが、洗濯はいつしているの？ といった状況だ。

とりあえず、私が出来た労働として家事で金銭を稼いでいる、といった状況だ。

どうやら日本のような電化製品というものは存在せず、全て古典的な方法で行っている。特に料理はガスレンジというものがなく、所謂竈で火を調節しなければならぬ。そのため、焼き加減や薪の足し木など今までいたことのない苦労があったのだが、なんとかそれらにも慣れてきた。だから、褒められるとはその努力が認められるといった感じがいい気がするのだ。

「ああ、美味しかったです」

「はい、お粗末さまでした」

ポットに残っていた紅茶は一滴も、皿に乗ってたクッキーも一かけらもなくなくなり、すっかり満足した。

カリイは再び読書を始め、私は後片付けとキッチンの片付けに取り掛かった。

なんてことのない、日常の様子となっている。

02 (後書)

口控...

(20111113)

オッサン生活12日目。

こぼこぼこぼ、と午後の紅茶を淹れる。格式高い香りが鼻腔をくすぐり、口に含む前からその味を期待する。

紅茶を注いだカップをカリイの前にそつと置く。すると、カリイは読んでいた本にしおりを挟み、そこでしばしティータイムへと興ずるのだ。

私は紅茶を満足げに飲む彼の姿をじつと見つめる。

相変わらずの、さらさら金髪。日本にいたころは本物の金髪をこんな間近で見たことはない。まゆ毛も、その長いまつげも金髪だから、染めているのではなく地毛だということは一目瞭然。

そして、大きくて透き通ったグリーンの瞳。青い目ならテレビの向こうを通じて見たことがあるが、緑の目はない。勿論、あちらの世界にもこのような瞳はあるようだが、如何せんその数は少ないようだ。おまけに、彼の瞳は深い森のような色合い。水色にちよつと緑が混じっているよ！ というものではなく、真正正銘の緑。翠。宝石と比べてもなんら遜色はないだろう、このような見事な宝石は見たことはないが。

そしてそれらのパーツ一つ一つが「ここにしかない！」と思われる見事な黄金比で飾られているのだ。眉の位置、目の位置、鼻の位置…。それら一つ一つがお互いを助長し合っている。

正直、これほどまで完璧な美形は今まで拝んだことはない。

毎日見ても飽きないし、慣れない。おまけに声は鈴を振ったかのような澄んだものだ。声まで可愛いなんてズルすぎる…！

「……そんなまじまじ見られると、お金もらいますよ?」  
「ひい!?! ちょ、見るぐらいタダじゃん! 減るもんじゃないし」  
「確かに減りませんが、精神的苦痛による損害賠償請求をしたいな  
と思います」

「ちょ、そんな本格的な単語言わないでくれる!?!」

怖い怖い。

この見た目に騙されちゃいけない。この子、こんな見た目でもお  
腹真っ黒なんだ。特にお金に対して汚い……すごい執着があるんだ  
った。気をつけないと、私の借金は知らない間に水増しされていく  
気がする……。

動揺を隠すために紅茶を一口飲んだ。その味に心がじんわりと暖  
かくなる。

「ところで、そろそろ小麦がなくなりそうなんだけど、どこかに保  
存してあるの?」

「保存? そういったものはしてないですね。今ここに出ているも  
ので全部です」

「ええっ!?! そ、それじゃそれ以降もうパンやクッキー作れない  
よ!?!」

心底悲鳴をあげた。小麦は袋にあと少ししか残っていない。明日  
のパンぐらいは作れるだろうが、それ以降の分はない。どうがんば  
っても、ない。いくらやりくり上手な私でも、元手がなければ工夫  
することすらできない。



明日からの絶望的な食事風景を想像して、がくつと肩を落とした。

「……それは困りましたね」

「困るも何も！ 絶体絶命のピンチだよ！ ……まあ、豆類と芋類はあるから、食事ができないってワケじゃないけど…」

「ふむ、それなら明日、サルデイスに来てもらいましょう」

「……さるでいす？」

「サルデイス。行商人です。一応、この家の食料は彼から購入しています」

「ええ、行商人！？ ちよ、誰もこの森にやってこないんじゃない？」

「サルデイスは間違いなく『物珍しい』人間に部類するでしょうね」

おいおい、この世で一番物珍しい人間がそんな笑顔で言うことじゃないでしょ。

とか思っていると、まるで心の中を読んだかのようなタイミングでにこりと微笑まれ、慌てて紅茶を飲んだ。

すみません、私は下僕です。ご主人様のことをそんな風に考えるなんて畏れ多いことでしたね、申し訳ないです！

心の中で何度も何度も土下座する。それぐらい、簡単にできるよ  
うになってしまったこの身体（心）が憎い…。

とりあえず、食糧面における危機的状况からは逃れそうだ。

それに私は少しわくわくしていた。

この世界に来てカリイ以外の人と会うのは初めてだからだ。

「ねっねっ、そのサルデイスってどんな人なの？」

「……… 会えば分かりますよ」

尋ねても微笑むばかり。んー、ケチ。いや、なんでもないです。

あんまりしつこく尋ねて情報料請求されたらたまらないので、ある

程度の所で引いておく。これ、この家で暮らすために必要な処世術ね、対カリイ用だけど。

そして、紅茶を飲み終え「ちょっと連絡してきますね」とカリイが席を立つ。一体どうやって連絡をとるのか興味はあるが、その前に私はこの後片付けをしなければならぬという使命がある。

………なんやかんや、しっかりと下僕精神が根付いているような気がする……。

そんな考えが頭をよぎったがふると頭を回し、後片付けに専念した。

とりあえず、明日サルディスさんに会うのが楽しみです。

### 03 (後書き)

ようやく登場人物が増えそうです。

(20111127)

オッサン生活13日目。

「初めまして。『いつでもどこでもだれにでも！ ニコニコ笑顔で商売ガスターシャ商社』のサルデイスです。今後とも御贔屓に！」

出会い頭100%の笑顔と100%の営業力で名乗ってきたこの人は、生粋の商売人なんだなと思わずにはいられない。

「こんにちは、カリイさん。いつも御贔屓ありがとうございます。いやー、今日はまたたくさんご購入いただいて、ありがとうございます」

「相変わらずの仕事の速さですね。その商魂たくましいところだけは、ぼくは一目置いてますよ」

「いやいや、そんな。カリイさんのようなお客様がいらっしゃるから、ウチがこうして成り立っているわけですよ」

二人はニコニコ笑顔でなにやらやりとりしているんだけど、なんか……怖い。なんでだろ、表面上は笑顔でお互い信頼してるぜ！ てな感じなんだけど、お腹の中では違うことを考えているような、そんな気になってしまう。

……私の気のせいであってほしい、切実に。

「ところで、今回いつも注文されないようなものもたくさん購入していただいたようですが、その理由は……彼、ですか？」

ちらりとサルデイスさんが私の方を見た。まあ、カリイさんと懇

意にしているなら、そこに見なれぬ私がいれば誰だと気になるのは仕方がないでしょうね。私だって好奇心の塊でサルデイスさんを見ているし。

「そう。しばらくぼくの下僕のタナカ」

「へえ、変わったお名前ですね！」

「あ、それは「タナカはちよつと辺境で生まれ育っているから。だからこの森が『人なきの森』ということを知らないで迷い込んでしまったんだよ」

私が名前を言おうとしたら横からかぶせるようにカリイが話を続けた。私の方を一切見ずに、いつの間にか作られている私の身の上を話している。

……ああ、そういえば名字って確かこの世界では特権階級やなんか特別な人にしかないって言っていたような。

そのことを思い出し、ナルホド、と頷いた。危ない危ない、田中晶ですなんて名乗ったら、それこそ人目を引きすぎる。サルデイスさんが悪い人とは思えないけど、余計な火種はつけない方がいいってことね、了解しました！

と、心の中で敬礼している間にあれよあれよと話は進み、どうやら私は「辺境で生まれ育ち、何も知らずのこの森に迷い込んで凍死寸前のところでカリイに拾われ、恩義を感じた私がそのままカリイの下僕になった」という話になっている。ををい、なんだその捏造だけどそれを否定すると即座にぽーいつとこの家から追い出されるから何も言わない。

はい、私は貴方様の下僕でございます。

「なるほど。いやいや、カリイさんの懐の広さにただただ感激するばかりですね！ 私めには全く真似のできないことですよ」

「まあね。それで、今回頼んだものはそれで全部？」

「いえ、ご購入いただいたのはこちらの分で…。残りはいかがでしょうか、という商品です」

「相変わらず抜け目ないと言つか…。タナカ、あの中で何か欲しいものないか、見てきて下さい」

「あ、うん」

急に話を振られて慌てて意識をオンに戻す。

まず、カリイが頼んだ分を見分する。…うん、これだけあれば数カ月は大丈夫でしょ。あまり日持ちしないものは量は少なめ。日持ちするものはたっぷりある。あと、名前が分からない食材もあるけど…まあ、この辺は後でカリイに聞けばいいか。

それから、サルデイスさんが持ってきた品物を見る。そこには食材から日用雑貨まで幅広くそろっていた。下手をすれば、カリイが頼んだ分よりも多いんじゃない、これ。このあたり、商魂たくましいという言葉が彼にぴったり合うなと思った。

「えー、これは何の野菜ですか？」

「お、さすがタナカさん、お目が高い！これはピコロと言って、この時期では滅多に手に入らない幻の食材なんですよ。栄養価がすごく高く、味はそうですね。米のような甘みがあります」

「お米？ お米も取り扱っていますか？」

「はい、我がガスターシャ商社で取り扱っていない者は人間の誕生と寿命ぐらいで、それ以外のものなら何でも扱っていますよ！」

「なんだか怖い単語が出たなそれ。だがあえてそのあたりはスルーしておこう。確実にスルースキルだけは磨かれていると思うな、うん。」

「えっと、お米、今ありますか？」

「はい、こちらに長米から短米まで、そろってますよ」

指さされた方に行って覗きこめば、確かにそこにはお米があった！うわ、懐かしい！長米ってのはタイ米みたいなものかな、短米はジャポニカ米かな。どっちにしるお米があるというのはありが

たい！

「それじゃこつちの短米をいただきます」

「はい、毎度ありがとうございます！」

「それと、お味噌つてありますか？」

「ありますよー。赤味噌白味噌あわせ味噌、生憎今日は6種類ぐらいしか持ってきていないのですが…」

「少し味見してみても？」

「どーぞどーぞ！」

壺の中に入っている味噌を少しだけ掬って味見をする。な、懐かしい…！ まさかこの世界に来て和風を味わえるなんて思っていた。諦めかけていた味を堪能で来て、涙が出てきそうだ。

「このお味噌と、このお味噌、両方ください」

「毎度です！」

よし、この二つがあれば和風味が作れる。贅沢を言えば醤油も欲しいところだけど、どうやらそれはないようだ。惜しい、お味噌があるなら醤油もありそうなものなのに…。魚油はあるようだけど、あまり好みではないし。

……こうなれば、作るか、醤油を。だが、作り方が分からない…。

「ああ、それと服を何着かいただけませんか？」

「へえ、カリイさんが新しい服を御所望で？」

「いや、ぼくのじゃないよ。タナカの服が欲しいんだ」

「ははあ、なるほど。確かにカリイさんの服を彼は着れませんしね。ケラケラ明るく笑いながら衣類が入っている袋を取り出す。

「それじゃこの中に入っている服は、全部サービスで差し上げますよ」

「えっマジで!？」

「ええ、いつもカリイさんにはお世話になっていますし。タナカさんに恩を売っておくのも重要な戦略ですよ」

あっけらかんと言ったよこの人。でもそう言っておくことが重要

なのかもしれないね。何と云ってもカリイは守銭奴だし、そのカリイと商売できるといふのは、それだけサルデイスさんにとって必要なことなんですよ。それならこの服ぐらいは安いもんだってことか。

「じゃ、全部で…これぐらいで」

ぱつと私の世界で言うそろばんみたいなものを弾いて、そこにある数をカリイは眉ひとつ動かさずに見る。

「…これだね。これ以上は、譲れないよ」

「あいたたた…。カリイさんては相変わらずキビシイ方ですね。せめてこれぐらいは…」

「もう一度言うよ？ これ以上は譲れない」

「あーもう降参ですよ！ 毎度あり〜」

さすが師匠、値切りのプロだ。金に関しては容赦ねえ！！

カリイが示された金額をサルデイスさんに渡した。それと一緒に小さな布袋も渡した。

「これ、昨日までにできた分。宜しくお願いしますね」

「あ、これはこれは！ いつもありがとうございます！！」

「いえ、貴方のところが一番しっかりしていますしね。ぼくも助かっています」

「いやいや、これもそれも全てカリイさんのお陰ですよ！ 今後ともご鼻屑に…」

ほくほく顔で布袋をしまいこめばさつさと残りの商品を片付ける。そして来た時と同様素晴らしい笑顔を浮かべて、サルデイスさんは去っていった。

「カリイ。最後に渡したの、何？」

「あれはぼくが作った薬ですよ。この森でしか取れない薬草を調査したもので、他ではなかなか作られないものなので、希少価値があるんです」

「なるほど。そうやってカリイとサルデイスさんは成り立ってるん



だね」

「ええ。大抵はサルデイスンあの勢いで彼のいい値で商売できますからね。だから高く売れるんです。まあ、ぼくには効かないですが」  
「にっこりとほほ笑むカリイを頼もしいと思うべきなんでしょうね、これ。」

「それじゃ私、食材を片付けますね」

「宜しく願います。ああ、それと服も貴方の部屋にしまいなさい。ずっとその格好じゃイヤでしょう」

「ああ、それもありがとうございます。二着を着まわしというのはなかなか大変だったので、本当に助かりました」

素直に礼を言う。カリイと私の身長差は歴然で、サルデイスさんの言う通り彼の服は着られない。唯一残っていた「以前この家で助けた男」の服を着ているのだが、それも二着しかなく、ずっとそれを着まわしていたのだ。節約を旨とするため別にたくさん服が必要というわけではないけど、それでもそろそろ限界に近付いてきている服を見るたびにため息が出ていた。

だから、今回新しい服が増えたことは本当に嬉しい。そのことをカリイが気付いていてくれていて気にかけてくれたことが、嬉しい。

さすが御主人様！　と思わず言いたいほどだ。

「まあ、これで外に出られるようになりましたね。これからは外でも重労働してもらえますし…」

「へ？」

「今までの服は全て室内用で屋外には適していませんでしたしね。ぼくはあまり寒い外には出たくないので、やはりここは下僕であるタナカが外の仕事をするべきでしょう。ああ、本当に良かった。防寒着ができて」

「にっこり。微笑むカリイを直視できない。」

この人の親切心には常に裏があることを忘れてはいけない。

新たに増えた己の仕事内容にかかるく眩暈がした。

## 04 (後書き)

行商人をあまり生かされなかった…。

(20111127)

オッサン生活15日目。

「あー…今日も寒いなあ…」

吐く息が真っ白。おそらく、外は零下だろう。この家には温度計というものはないので、室内や屋外が何度なのか分からない。それでも、部屋の中はどこか暖かいのが不思議だ。まあ、暖かくて不便を感じるどころかありがたいからいいけれど。

そして私は斧片手に薪を割る。はつきり言つて、薪割りなんてしたことはない。現代日本で薪を使うなんてこと、バーベキューぐらいだろう。それでもすでに使えるような状態になっているので、わざわざ木を切り倒してそれを使いやすいように割るなんてこと、しなくていいのだ。

だから、最初は全く出来なかった。この身体のお陰で斧が重くてふらふらするということはないけど、この薪割り力があればそれでいいというもんじゃない。バランス良く、如何に真っ直ぐ力を振り落とせるか、それが重要だ。薪割り、案外奥が深いぞ…！

以前の私の運動神経ではこんなに早く薪割りに慣れるなんてことはできなかったが、この身体、なかなかのスペックが高いようで、何度か繰り返すうちに加減が分かった。今ではすこーん、すかーん、と小気味よい音を響かせて薪が割れていく。

……これ、かなりの快・感！だな。

「よし、これぐらいあれば一週間は持つかなつと」

割った薪をいくつかの束に括つてよいしょと担ぐ。担いだものはそのまま家の中に持って入り、竈の近くにどさりと落とした。

「御苦労さまです」

「いえいえ。あー、あつたかー…」

私の姿を見たカリイが労いの言葉を言ってくれた。言うだけはタダっていうからね。薪割りをしたお陰である程度身体はぽかぽかしているが、それでもやはり外気は冷たい。その冷たい風がこの部屋にはないから、それだけで生き返る気分になる。

「はい、どうぞ」

「あ、ありが…ええっ!?!」

差し出されたカップを条件反射で受け取ってから驚いた。カップの中には綺麗な色と香りの紅茶が淹れてある。

「……これ、どーした…?」

「もちろん、ぼくが淹れましたよ」

「か、カリイ様手ずから…ですかっ!?!」

「なんですか、その驚きようは。ぼくだっってお茶ぐらい淹れますよ」「いやいやいや、それ全っ然説得力ないんだけど!?! だって、私カリイが台所に立っている姿なんて見たことないんだけど!?!」

「失礼ですね。ぼくだって今まで一人で暮らしてきたんだから家事の一通りぐらいできますよ」

「そ、そりゃあそーかもしないけど…」

「それともなんですか、『一杯金1枚ですよ』とでも言った方がいいですか?」

「あ、ありがたくいただきますっ!?!」

不吉な言葉を言われる前に紅茶に口をつける。甘い味が口の中に広がる。

「あれ、美味しい…」

「どこまで失礼な人なんですか。ぼくが淹れたんですから美味しいのは当たり前ですよ」

「いや、カリイって…なんか、イメージ家事出来なさそうだから…」

「先ほども言いましたが、僕はひとりで暮らしてきたんだから、家事の一通りはできますよ」

「その割にはここの状態はかなり悪かったんだけど…」

「必要最低限しか使いませんから」

「あーなるほど…」

どうやら家事はできるがズボラなのは間違いないようだ。あと、片付けるのが面倒だとか、そんな感じ。うん、分かる分かる。

一人で納得しながら紅茶を飲み切る。身体の芯から温まり、ほっと人心地がついた。

「さて、今日は味噌鍋にしましょうか」

「ミソ、と言えば先日飲んだみそ汁のことです？」

「そーそー。今回はその味噌汁じゃなくて、味噌と出汁でお鍋にしようというわけ」

「美味しかったですね、みそ汁。今日の鍋も期待しても？」

「もちろん！ ま、出汁が上手にとれるかどうかが決め手だけどね。ま、できるまでちょっと時間かかるし、カリイは本でも読んでたらいよいよ」

「そうですね、タナカの仕事を奪っちゃったら可哀想ですし」

おおい、なんてことをなんていい笑顔で言っちゃうんですかこの坊ちゃんは！！

結局何も言い返せないのは下僕根性が身についてきたんじゃないかと、この笑顔に負けているからだと言いたい！！

……………そう自分に言い聞かせなければならぬほど、下僕根性が身についてきたなあ…としみじみ思ってしまう自分が悲しい。

05(後書き)

日常リターン。

(20111204)

## オッサン生活17日目。

今私は、カリイと一緒に森を歩いている。雪は丁度止んでいるため視界に困るということはないが、積もり積もった雪の中を歩いて行くのはかなり至難の業だ。私は別に雪国出身というわけじゃないし、ウィンタースポーツが得意だというわけでもない。つまりは、こんな雪の中を歩くことは今までの人生で数えるほどしかない。何度も雪に足を取られながらも、何とかカリイについていく。

カリイはというとさすが雪国（？）育ち、私みたいに足を取られることもなく、ざくざくと雪の中を進んでいく。ちっちゃい彼に図体ばかりでかい私がついていく図はなんとも奇妙なものだが、それを見る人物もいないので、気にしない方向でいく。

「着きましたよ、……ここです」

突如開けた視界。それまで周りを覆っていた木々がなくなり、ぽかりとそこだけ開けた場所がある。

そこにあるのは、湖。向こう岸が見えるぐらいの、さほど広くない湖で、その縁から大人の足で十歩程離れたところに、湖を囲うようにぐるりと木々が立っている。

ぶるり、と身体が震えた。寒さからではない、何か　何か、得体のしれない感覚が、私を襲ったからだ。

「こ、こんなに寒いのに凍ってないんだね」

「不凍の湖、ですからね。それに第一、凍っていたら今頃貴方はよ



くて骨折、悪ければもう命はないでしょうね」

「そんな怖い事言わなくても……」

「検証に基づいた仮定ですから」

さらりと恐ろしい事を言う天使に、先ほどとは違う意味で身体が震えた。やだこのこ、やつぱりおそろしいじゃないですか……！

そして再び、私はカリイから目の前の湖に視線を移す。

この湖に、私は現れたらしい。カリイ曰く、光が人型になって、そのまま湖に落下した、ということなのだが、残念ながら私にはその記憶が全くない。

私がこの世界にやってきたヒントが少しでもないかこの湖に連れてきてもらった。だけど、湖を前にしてもやはり何も思い出さない。

そつと湖に近づき、その縁に座った。そして、湖の水を触ろうと手を伸ばすと、その手を小さな手が遮った。

カリイの手だ。

「……何」

「触らない方がいいですよ。……この湖には全体に神力がかかっていますから」

「し、神力……？」

「ええ。この湖は女神の憩いの場として存在していますから」

「めがみのいこいのば……？」

何それ、ファンタジー。いや、そういえばこの世界はファンタジーの世界だった。いやいや、最近生活に慣れてきてそのことを忘れかけていたけど、それは重要なファクターだった、うん、もう一度肝に銘じておこう。

「あのお……その『神力』って一体何？」

「ああ、タナカの世界には魔力や神力といったものはなかったんで

すね」

「うん。だから、よければ教えてほしいんだけど…」

「簡単ですよ。魔法は人が使うことができる祈りの力です。それを魔力と言います。基本的にこの世界の人間が備えているものです。

まあ、強弱はありますが、生まれたばかりの赤子にも使えます」

「え、マジで？」

「はい。力が強い赤子は泣きながら物を浮かしたり火を出したりするようです」

「そ、それはそれはなかなか難儀なことでは…」

なにそれこわい。

泣くたびに親御さんはときどきしなきゃいけないなんて、軽く家庭内暴力な構図が目に見えかぶ…。しかも赤ちゃん無意識無自覚だし。

「それで、神力って？」

「神力はその名の通り、神のみが持つ力です。魔法ではできないようなことが出来る力です」

「えーっと、神様ってそんなしょっちゅう現れるもんなの？」

「神は気まぐれなので、さほど現れません。ですが、逆に言えば気さえ乗ればいつでも現れる存在です」

「なにそれ。究極の二一ト」

「にーと？」

「あ、知らなくていい言葉だから。それで、この湖は女神さんのお気に入りの湖ってワケなのね」

「そうです。冬を司る女神の湖です。なので、この森にはいくつも湖があるのですが、この湖だけ一年中凍らず、このように姿を保っているんです」

「へえ…。でも、なんで触らない方がいいの？」

「神力にあふれているからです」

「だから、その神力には触らない方がいいって理由は？」

そこが聞きたいのに、なんだかすごく遠回りになっているような気がする。じつとカリイの目を見つめると、はあと盛大にため息を

つかれた。

「神の力。その力は人知を超えたものです。人にとって強すぎる力に触れると、どうなると思いますか？」

「……………なんとなく、悪い事が起こるような気がします」

「なんとも…幼い回答ですが、まあいいでしょう。端的に言えば死んでしまつかもしれないですね」

「端的に言いますぎだよ！！ やだそのデンジャラス発言！！」

「まあ、タナカはその湖に浸かっても、一応こうして生きているのですから大丈夫だとは思いますが…あまりお勧めできませんね」

「大人しく、したがっておきます」

そんなこと言われてはいはいと触れるほど根性も好奇心もないよ！立ちあがると一気に湖から距離をとる。水が完全にかからないところに来てようやく一安心した。よし、これで大丈夫。

「とりあえず、何にも手がかりはなしっつと…」

「タナカは一体何を知りたいんですか？」

「んー？ どうやったら元の世界に戻るか」

「…姿を直すことではなくて？」

「それはだつて、カリイがやってくれるでしょ？ それに最終目標はやっぱり自分の世界に帰ることだし…」

「そうですね。タナカはあちらの世界に帰りたいんですね」

「そりゃ、やっぱね。生まれ育った所だし。何より、あつちには私の居場所があるから」

「居場所…」

「あ、モチロン、今この世界で過ごせるのはカリイのお陰だよ。だけど、やっぱねえ…。私はこの世界じゃなんだか異質な存在だなあつて思っちゃうワケよ。カリイにも迷惑かけてるわけだし。やっぱ元通りに戻ることが一番いいんじゃないかなあつて思っわけで」

「……………」

あれ、カリイが黙っちゃった。うーん、またバカなこと言ってる

とか思われてるんかなあ。でも、これは私の偽らざる本心だからなあ。

肩身が狭いというわけじゃないけど、やっぱりなんか「変」なんだし…。

「よし、とりあえず一つ区切りがついた！　まずはさっさとお金稼いで元の姿に戻ろう。それが目下の目標で」

「そうですか。それじゃ気持ちの整理が着いたところで…」

どんつと壺を私の目の前に置いた。それは家からここまでカリイの背中にあつたものだ。

「えーっと、どーゆー意味かな…？」

「この壺にあの湖の水を汲んで、それを背負って帰って下さい」

「ちよ、ちよつと待って！　えー、まず一つ。背負うのは誰？」

「勿論、タナカですよ」

「んじゃ次。この壺に水を汲むのは？」

「勿論、タナカですよ」

「さっきあの湖の水に触らない方がいいって言ったのは誰ー！？」

「大丈夫ですよ。ほら、ちゃんと柄杓持ってきていますから」

ニコニコにつこり。壺の中に入っている柄杓を指さしてにつこり笑うカリイ。

「い…「まさか嫌とか言いませんよね。貴方の立場は十分把握していると思いますし」

被せてきやがりましたよこの鬼畜！！

ああ、ダメだ。こうなつたカリイを動かすことなんて今の私の立場上でできない…！！

こうなつたらものすごく、ものすごく慎重に水を入れてやるん

だから…!!

握った柄杓が「ぴしっ」といったような気がしたのは、気のせいだということにした…。

## 06 (後書き)

魔力と神力の説明。

分かりにくくてもフィーリングで感じ取っていただければ幸いです。

(20111211)

閑話 カリイの独白 (前書き)

カリイ視点。

## 閑話 カリイの独白

妙な同居人ができた。

そもそも、同居人という括りにしていいのか分からない。己と相手との関係性は「主人と下僕」。それは己自身が定めた関係性。

あの日、一つの光が現れた。それは強烈な光。純粹な光そのものを凝縮したかのような、威圧さえ感じる力。この自分が、一瞬呼吸を忘れる程の力。

やがてその光は徐々に収まり、その代わり人の姿へと形作っていった。この目で見なければ、到底信じることができない現象。しかし、それは現実には、己の目の前で生じた現象。一瞬、目を疑った。しかし、形作られた肉体はそのまま湖に沈み込み、それを救ったのは他でもない己自身だ。

女神の憩いの場にその身を浸からせて何の影響も受けていないその様子を見れば、その事実はどこか背筋が凍った。

しかし、目覚めて会話を交わしていると、なにやら常人とは異なる言動をする。これはやはりあの湖の影響なのかと考えるが、どうやらそうでもないらしい。

正真正銘、「彼」はこの世界の住人ではなく、異なる空間からやってきた人物の様だ。

誰が一体「彼」をこの世界に送りこんできたのか、それは分からない。それこそ、人知を超えた存在 「神」の思惑によって、なのだろうか。



目覚めて己の立場を理解した後の『彼』は、この世界の一般常識を知らないことを除けば、極々平凡な人間だ。そして、その身体的特徴と本人が元来備えていた家事能力を生かして、この家をより最適に過ごせるよう尽力を尽くしてくれている。

ニコニコと、笑顔を振りまく。その笑顔は作られたもの。時には引きつったものがあるが、ではなく、『彼』の本心のものなのだろう。

そんな『彼』を見ていれば、どこか安らぐ己がいる。

それと同時に、あくまでも普通の『彼』の様子を見れば、どこか恐怖を抱かずにはいられない。

彼が身に纏う力。正体が分からない、その力に、脅える己がいる。

それは、彼にとってほとんど経験のないことだった。

他者から脅えられることはあっても、他者を脅えることなど、生まれて感じたことはない。

おそらく、『彼』自身には覚えのない事。だが、その力を身に纏いつつあくまでも『普通』に振る舞うことができる『彼』が恐ろしい。

「本当に……。貴方は一体何者なのでしょうね」

すやすやと、それこそ人畜無害そうな表情で眠る『彼』を見て思わずそんな言葉が口を出た。

見た目は本当に、どこにでもいる中年男性。『彼』の言を借りるのならばオッサンそのものだ。尤も、『彼』曰く己は「二十歳のジョシダイガクセイ」なるものらしい。

ジョシダイガクセイというものが何かよく分からないが、とりあえず今の姿は本来の姿ではないようだ。それは己にも分かった。そして、元の姿に戻ることが『彼』の願いだということも。

「まあ、そのために今頑張ってるんですけどね」

ふに、と鼻をつまむ。しばらくすると「がっ！」という声を出しつつ、口で呼吸を始めた。その様子に思わず笑みがこぼれる。

「とりあえず、しばらくはぼくに大人しく仕えることですね」

おやすみ、と小さな声を残して部屋を立ち去った。

ひとまず、今の生活に不満はない。己が飽きるまで、『彼』にはせいぜい働いてもらおう。

そんな思惑を知ってか知らずか、タナカは「ふへっ」と小さな寝言を呟いた。

閑話 カリイの独白 (後書き)

何となく、カリイ視点で。

気づけばユニークPV10000越えありがとうございます！今後とも、よろしくお願いします。

(20111218)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0788y/>

---

気が付いたらオッサンでした。

2011年12月18日23時54分発行